

『雨を待っている』  
ワンダナ・カッマムパティ

雨を待っている。

12 年間雨を待ち続け、今、その時が来た。

---

12 年前…

「起きろ、出勤時間だ。雨だよ」

「もう嫌だよ」

起こされた私は、地面に叩きつけるような雨音を聞いた。

雨粒の感触を肌を感じるような雨を想像しただろう。私が住む海王星では、ダイヤモンドの雨が降るのだ。透き通るようなキラキラのきれいなダイヤモンドの雨が降る。

雨は鋭く、肌に当たると痛いし、空はいつも真っ黒だ。ダイヤモンドの雨の中、スペーススーツなしで歩けないし、雨の日は降ったダイヤモンドを集める仕事があるので、憂鬱だ。毎年宇宙船がやってきて、12 年かけて全てのダイヤモンドを地球に運んでいく。

私の両親は 2038 年にダイヤモンドを地球に送るビジネスに目をつけ、何千人もの人々と共に地球から海王星に移住してきた。ダイヤモンドを集め、梱包し、12 年の歳月を要して地球に送るのだ。私は 2044 年に海王星で生まれ、17 年間ここに住んでいる。この仕事は 2 年前に始めた。海王星は非常に寒く、夏でも気温が 0 度以下だ。私達は断熱された都市を作り、与圧されたキャビンに住んでいる。ずっとこんな生活をしてきたが、もう嫌だと思うようになってしまった。

海王星に住む私達は、地球について教わり、地球で暮らす人々の写真や映画などを見せてもらっている。特に雨が降った時、地球人は幸せそうだ。雨の中に立ち、雨を肌を感じ、雨の中でキスをし、雨の中で泣く。雨の中で踊ったりもする。雨は爽やかで魂に響き、生命を与えることができそうだ。それを体験したことがない私の唯一の夢は、地球で雨を体験することだ。ずぶ濡れになり、水滴がしたたり落ちるのを肌で感じたいのだ。

雨、水の雨をリアルに感じたいと思い、宇宙船に乗り地球へ行った。

---

さて、今…

12年間家族にも友達にも会えない旅をし、地球に着いた。  
天気予報は雨だ。私は公園で雨が降り出すのを待っている。

---

最初の雨粒が落ちてきた時、私はその柔らかな感触を肌を感じた。その水滴を手で受け止め、飲んだ。今まで味わったことのない、最高の水だった。雨が少し強くなると、より強い水滴が服を濡らすのを感じた。爽やかで、心が落ち着く感じがした。こんな自然でシンプルなものが生きていることを感じさせてくれるなんて、本当に感動した。涙が頬を伝ったが、雨はそれを隠してくれた。雨がやむまで、雨の中に座って、雨粒が肌に触れる感触を味わっていた。

12年間待ってよかった。

(字数：985字)